

書評

日本石紀行

加藤碩一・須田郡司 著
 発行；みみずく舎，発売；医学評論社
 2008年9月8日発行，定価2,200円（税別）
 ISBN 978-4-87211-896-4

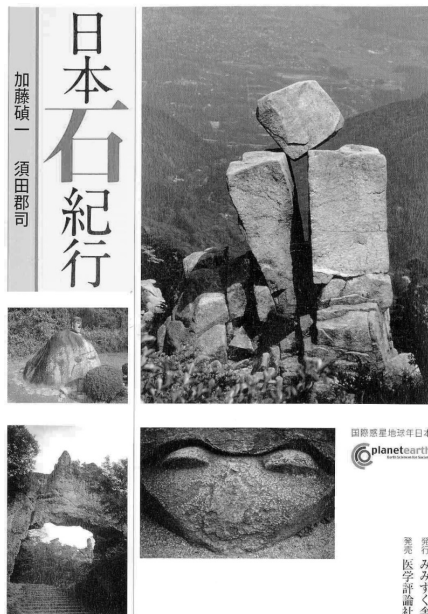
これまででもたくさんの楽しい石を紹介してくれた加藤碩一さんが，今度は石の旅に誘ってくれるような本を出しました。「日本石紀行」です。今度は道連れがいます。写真家の須田郡司さんで，表紙の地藏岩（三重県御在所山頂付近）をはじめとする多数の写真を，この本のために撮ってくれました。プロの写真家と熟練した地質家というおもしろい（失礼！）取り合わせですが，何でも須田さんは写真家としての目で石の造形に心引かれ，全国各地のいわれのある「石」の写真を撮りためてこられたとか，このような方がおられることは，石に関わる研究者としてとても嬉しく思われます。この本は，各地の「石」の造形を対象別に紹介し，あわせて地質を解説するものです。

被写体としての「石」がいかにもバラエティーに富むかは，この本の構成から伺えます。この本は次の9章からなっています；第1章：常世から現世へ石と道連れ，第2章：神宿り，神籠るところ，第3章：ありがたき仏のおわすところ，第4章：恐れ戦く怪力乱神，第5章：人の世の移り変わり縁，第6章：進化の流れに沿って，第7章：海陸の王である巨獣，第8章：弱肉強食の猛獣の世界，第9章：人類の良き友—ペットや家畜。この構成は，人知を越えた存在に見立てられた「石」から徐々に身近な存在に降りつつ，様々な「石」とそれにあわせて地質を解説するものと言えましょう。

古くからいわれのある「石」とくに巨石には，神を感じさせる厳かさや，あるいは人間を越えた巨大な存在が投影されていると思われます。古代，人の力が自然の力に比しはるかに脆弱であった時代は，なおさらでしょう。そういえば「天の岩戸」というお話が，日本神話のはじめのほうにありました。第1章，第2章，第3章は，神や仏の存在，あるいはこの世を離れた世界を垣間見させる「石」の話です。

第4章は怪力乱神に見立てられた石ということですが，主役はいわゆる「鬼」や「天狗」です。神性をもつ存在とはいえ，ぐっと人間に近づいてきました。そして第5章では，人生航路に見立てた石の造形を解説しています。

第6章以降は，動物に見立てられた石のオンパレードです。その先頭には両生類や爬虫類に見立てられた石を取り集めていますが，これを「進化の流れに沿



って」と題するのは，いかにも地質学者らしい発想ではありませんか。家畜やペットに関わる石となると，天然による造形だけではなく，馬繫岩（石）のように人が作って実用に供したものも取り上げられています。これも大事な視点でしょう。

収録の「石」は，表紙裏の地図にあるように，全国各地に所在します。加藤さん，須田さんお二人が撮影した写真だけではなく，地質調査総合センターの職員が撮影した写真も掲載されています。これは，石の造形だけではなく背景の地質を解説するために必要となっているようです。同じように，ブリコ石，虫入り琥珀，虎目石といった鉱物標本の写真も，石の造形の地質学を語るために掲載されています。さらに巻末には，この本の中で取り上げた事柄限定ですが，地質用語の解説が置かれています。地質に親んでもらうことを意図した本ですから，取り上げた石の地質学的解説は必要なことです。が，なかには須田さんの写真だけをもとに地質の解説を加えざるをえなかったケースもあるようで，苦勞のあとがしのべられます。

余談になりますが，10月12日付朝日新聞be Sundayが，神の世と現世の接点「磐座」を取り上げ，本書の縁で加藤さんのコメントが掲載されていました。何かが乱れていると感ぜずにいられない昨今，実際に信仰の対象となった磐座に限らず，人類よりはるかに長期にわたってこの世すなわち地球の変遷を見てきた石たちの声を聞くのは，悪くはないかもしれません。

（産総研 地圏資源環境研究部門 奥山康子）